

4-(4) 成果

1. 現状の説明

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。

<1>大学全体

【キリスト教主義教育】

キリスト教主義教育に関しては、従来からキリスト教関係科目区分を設けて「聖書A」「聖書B」の計4単位が必修であったが、2009年度入学生からは、キリスト教・同志社関係科目区分と名称が変更され、キリスト教関係の科目の他、同志社や新島襄に関する科目を充実させるとともに、必修の「聖書A」「聖書B」に加えて、キリスト教や同志社に関する科目から2単位以上選択必修させることとなった。本学の学生全員が共通してこのような科目を履修することは、キリスト教主義教育を教育理念の第一に掲げる本学として相応しいことである。

【国際主義教育】

国際主義教育は、同志社創立時から脈々と受け継がれてきている本学の教育理念であり、その成果は本学の海外留学制度や学芸学部国際教養学科の留学制度などに表れている。

海外留学制度は本学の国際交流センターで担われ、長期の留学制度としては協定大学留学、認定大学留学、セメスター語学留学があり、短期のものとしては夏期または春期休暇中の海外研修制度がある。いずれの留学制度においても十分な事前指導、留学中の指導、帰国後の事後指導が行われており、それぞれの留学体験をより深めることができるようになっている。国際主義教育の目的は必ずしも留学することだけではないが、目に見える成果としてはこのような海外への留学を上げることができる。

「2012年度在学生アンケート」では、「留学生支援体制が充実していること」に対する「とても満足」「まあまあ満足」の合計は、29.9%であり、実際に留学した学生は限られた数であることを考えるとかなりの高率であると考えられる (4(4)-1 p. 29)。

【リベラル・アーツ教育】

既述のとおりリベラル・アーツ教育の目指すものは、幅広い教養と深い専門、並びに汎用的能力の涵養である。幅広い教養に関しては共通学芸科目を中心として、他学科科目履修、他大学単位互換科目履修、国内外の留学制度などにより展開され、深い専門については学部学科の専門分野の科目で展開されている。また、汎用的能力の涵養についてはDWCLA10として全学の科目で展開されている。

幅広い教養を身につけることができたかどうかの成果を測定する方法は現在のところ持ち合わせていないが、卒業生へのアンケート実施など、測定方法の研究が今後必要である。汎用的能力の獲得については2013年度の授業アンケートに「DWCLA10のうち、この科目の履修を通じてその獲得や向上に役立ったと感じられるものを選んでください (個数自由、なしも可。)」という質問項目が加わった。これに対する回答 (全科目平均) では、思考力54.5%、分析力29.8%、コミュニケーション力20.3%、創造力19.1%と続き、最も低かったのはリーダーシップの2.8%であった (4(4)-2 p. 2)。ちなみに、2013年度のシラバスに記載されている

4（4）成果

DWCLA10の力でもっとも記載が多かった順は思考力1,661件、分析力1,580件、コミュニケーション力937件で、最も少なかったのはリーダーシップの191件であり、教員側の意図と学生の受け止め方は全体でみれば一致している（4(4)-3）。

〈2〉学芸学部

学芸学部では、各授業については、学期ごとに実施する授業アンケートの結果を担当教員が確認することにより、学部が定める教育目標に沿った成果が上がっているかどうかを検証している。また、単位修得率、GPAの得点分布、卒業生の進路選択、就職率などからも、教育目標に沿った成果について総合的に判断している。

（音楽学科）

音楽学科では、教育成果については、単位の修得率、GPAによる得点分布、学位授与率、就職率などによって測定している。演奏専攻と音楽文化専攻コンピュータ音楽コースでは4年間の集大成として公開で卒業試験を課しており、また音楽文化専攻では、卒業論文要旨の冊子を作成し、研究内容を閲覧できるよう整備している。

（情報メディア学科）

情報メディア学科では、教育成果については、学位授与率、就職率、進学率などによって測定。2012年度の就職決定率は95.6%であり、このうち情報通信関係が20.9%を占めており、本学科の特徴を示している。（4(4)-4 p.1）

また、進級制作展、ポスターセッション、卒業研究発表会など、成果発表の場を設けている。

（国際教養学科）

国際教養学科では、教育成果全般については、GPAの得点分布、TOEFL・TOEICの得点分布、学位授与率、就職率などによって測定している。TOEFLは留学前に複数回、TOEICは留学前と留学後の決まった時期に受験を義務付けており、学生個々の英語力の向上を測定する基準として、また年度ごとの動向を判断する指標として有効である。

留学の成果については、留学先での正規科目履修率、修得単位数などが判断の目安となる。ただし、留学先の国や大学により条件が異なるため、単純に数字を比較して優劣を判断することは適切でない。

2年次春学期末（留学前）にはポスターセッション、3年次秋学期（留学後）には留学報告会、4年次末には卒業研究発表会と、学科における学習段階の節目ごとに成果発表の場を設けている。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、大学4年間で身につけたい10の力をDWCLA10とし、各授業担当者はシラバスにその中のいずれを達成すべき目標とするかを記述している。また、学部では、コミュニケーションカードを授業において配布し、回収することで、学生の学習成果の測定に活用している授業も多い。さらには、学期ごとに実施する授業評価アンケートの結果を教員自身が確認し、授業講評により学生へのフィードバックを確実にすることで、学生の満足度と教員の到達度評価を確認している。単位の修得率、GPAの得点分布、就職率など

から、学部が定める教育目標に沿った成果が上がっているかを総合的に判断している。

(社会システム学科)

社会システム学科では、各種資格試験や各種検定試験等の、教育効果を客観的に検証する機会について、社会システム学科の学生は、相対的に、積極的に活用しようとする姿勢が見られるが、結果の検証を丁寧に行い、更なる活用につなげていく必要があると考える。

(現代こども学科)

現代こども学科では、卒業時における卒業生へのアンケートにおいて、学科への満足度はほぼ100%に近い数値を毎年得ている。小学校教員採用率は高い数値を維持しており、幼稚園就職、保育所就職も順調であり、その他の就職も含めると、就職決定率は毎年ほぼ100%に近い数値を維持している。

<4>薬学部

教育成果は、薬学部では単位の修得率（留年率）、GPA の得点分布、薬学共用試験と薬剤師国家試験の合格率などによって測定している。薬学共用試験と薬剤師国家試験は全国の全ての薬学部に通じる公的な試験であるので、これらの合格率は学習の到達度や教育成果の最適な指標になると考えられる。

近年、全国的に薬学部志望者の学力低下が著しいという問題が指摘されている。本学部においても学生の資質・学力に大きな乖離があり、すべての学生を一定の目標に到達させることができていない現実がある。学力・資質において見劣りする学生を在学中に一定レベルまで引き上げる方策を策定する必要がある。

薬学共用試験は、開始されて4年が経過したが、これまで合格率は98%以上である。薬学教育6年制に対応した新しい薬剤師国家試験は、これまで2回（第97回、第98回）行われた。本学卒業生の合格率は、第97回では90.6%で満足すべき結果であったが、第98回は72.2%と極めて低い合格率となった。原因と対策を検討中である。

薬剤師職は、卒業生数に比して求人数が多い状況にあり、当面、就職率は教育成果の適切な指標にはならないと考えている。

<5>表象文化学部

表象文化学部は、2学科とも少人数教育を展開しているため、課題の準備や発表及びディスカッション等を通じて、思考力やコミュニケーション能力に関する学習成果を測定している。また、各授業では、セメスターごとに実施する授業評価アンケートの結果を教員自身が確認し、授業講評により学生へのフィードバックを確実にすることで、学生の満足度と教員の到達度評価を確認している。修得単位数、GPAの得点分布、就職率などから、表象文化学部が定める教育目標に沿った成果が上がっているかを総合的に判断する。

(英語英文学科)

英語英文学科では、教育成果は、卒業研究、在学生アンケートや就職率により測定している。卒業研究については、7月のポスターセッション、1月の卒業研究発表会、卒業論文等で評価している。各自がプレゼンテーションを重ねるごとに研究テーマが掘り下げられ、卒業論文に結実しているのがわかる。DWCLA10に関しては、「思考力」「プレゼンテーション力」「コミュニケーション力」「変化対応力」「自己管理能力」「思いやる心」が身に付き

4（4）成果

たという実感が高かった（4(4)-1）。2012年度の就職希望者の決定率は94.8%であったが（4(4)-4）、就職以外に、国内や海外の大学院に進むもの、英語教師採用試験に備えるもの、海外で日本語教師のアシスタントをするものなど、実に多彩な人生を選びとっている。国際主義を教育理念に掲げている本学に相応しい成果を着実にあげている。

（日本語日本文学科）

日本語日本文学科では、教育目標に沿った成果を単位の修得率、GPAの得点分布、就職率など多岐にわたり測定している。さらに、全学的組織体であるキャリアサポートセンターと協働し、卒業生の進路選択の内実を把握し、蓄積している。さらに、学科懇談会や全学教授会などで測定結果を共有している。2013年3月の本学科の卒業生の就職状況は、事務職、総合職に続き、販売そして専門的技術的職業といった職種へ進む者が多い。業種としては、教育・学習支援業、金融・保険業、卸売・小売業のジャンルがそれぞれ17%～20%であり、「さまざまなくらしの現場で活躍できる女性」の育成に寄与するよう努めている（4(4)-4 p.1）。

＜6＞生活科学部

生活科学部では、教育成果は在学生アンケートや就職率により測定している。毎年度実施される在学生アンケートの結果は学部教員会議でも取り上げ、問題点について各学科で検討するよう促している。

（人間生活学科）

人間生活学科では、教育目標に沿った成果を単位の修得率、GPAの得点分布、就職率など多岐にわたり測定している。さらに、全学的組織体であるキャリアサポートセンターと協働し、卒業生の進路選択の内実を把握し、蓄積している。さらに、学科懇談会や全学教授会などで測定結果を共有している。2013年3月の本学科の卒業生の就職状況は、事務職、総合職に続き、販売そして専門的技術的職業といった職種へ進む者が多い。業種としては、卸売・小売、製造、金融・保険業、医療・福祉のジャンルがそれぞれ15%～20%であり、「さまざまなくらしの現場で活躍できる女性」の育成に寄与するよう努めている（4(4)-4 p.1）。

（食物栄養科学科）

食物栄養科学科では、教育成果は在学生アンケートや就職率により測定している。また、食物科学専攻学生のほとんどが受験するフードスペシャリスト認定試験の合格率、管理栄養士専攻学生全員が卒業時に受験する管理栄養士国家試験合格率によっても測定できる。

食物科学専攻では、DWCLA10のうち「分析力」「思いやる力」「自己管理力」が身についたという実感が高かった。また、この1年間で「専門知識や技術が身についた」51%、「1日に予習・復習にかけた時間1時間以上」43.3%、「本専攻に入学してよかった」81.4%、「本専攻の学びに対する満足度」65.8%と、まずまずの学習成果を上げていることがうかがえる（4(4)-1）。2012年12月に実施されたフードスペシャリスト認定試験の合格率は100%であった。過去5年間の就職率の平均は93.5%であり、2013年3月に卒業した学生の就職先は、本専攻の専門性に直結する分野の企業が約40%、学校教育が約10%であった（4(4)-4 p.1、4(4)-5 p.1、4(4)-6 p.1、4(4)-7 p.1、4(4)-8 p.1）。

管理栄養士専攻では、DWCLA10のうち「思いやる力」「自己管理力」が身についたという実感が高かった。また、この1年間で「専門知識や技術が身についた」70.2%、「1日に予

習・復習にかけた時間1時間以上」70.2%と全学の中で飛びぬけて高く、「4時間以上」に限っても10.0%であった。「本専攻に入学してよかった」78.7%、「本専攻の学びに対する満足度」67.5%であった(4(4)-1)。2013年3月に実施された管理栄養士国家試験の合格率は100%であった(4(4)-9 p.10)。過去5年間の就職率の平均は88.3%である。例年他学科より多少数値的に低いのは、国家試験合格発表(5月)を待って募集する病院があるためである。2013年3月に卒業した学生の就職先は、本専攻の専門性に直結する分野の企業が約34%、医療・福祉関係37%、学校教育が約8%であった。また、大学院への進学率は約4%であった(4(4)-4 p.1、4(4)-5 p.1、4(4)-6 p.1、4(4)-7 p.1、4(4)-8 p.1)。

〈7〉文学研究科

文学研究科では、各専攻の学位授与の方針が掲げる教育目標の成果に関して、学位授与数を基本的指標として、学位授与に至るまでの学修状況と学位授与後の進路を加味しながら成果測定を試みている。各専攻とも少人数教育に基づくきめ細やかな指導体制を整備しており、学生の研究計画に基づいた適切な指導を行い、研究に要する思考力や技能の養成を図っている。

(英語英文学専攻)

博士課程(前期)

英語英文学専攻博士課程(前期)では、学習の評価は原則として100点法で行い、年2回(9月と3月)、学生に通知している。毎年6月と10月に「修士論文中間発表会」を開催し、大学院生全員と大学院任用教員全員が参加して、学生各自の研究課題ならびに研究方法を相互批判する機会を設け、成果の点検に役立てている。課程修了後の進路に関しては、後期課程に進学する者を除けば、中等教育機関の英語教員や英語関連科目担当の大学非常勤講師が多数を占めている。その他、大学院で培った英語力をいかして民間企業に就職する者もいる。

博士課程(後期)

英語英文学専攻博士課程(後期)の教育の成果は、学会での口頭発表、学術雑誌等での論文発表、さらに学位授与率、就職率などによって判断することができる。課程修了後の進路に関しては中等教育機関の英語教員、大学の専任教員、嘱託講師が多数を占めている。

日本語日本文化専攻博士課程(前期)では、修得単位数、学位授与率、就職率、進学率などによって成果を判断している。課程修了後の進路は、国語の中学校・高等学校教諭専修免許状を取得して、教員になる修了生も多い。

(情報文化専攻)

修士課程

情報文化専攻では、1年次には12月に研究計画概要発表会を、2年次には7月に修士論文中間発表会、2月に修士論文発表会を行い成果報告の場を設けている。

〈8〉国際社会システム研究科

国際社会システム研究科における過去3年間の修了者数は、6名となっている。本研究科では、最長4年間まで計画的に教育課程を履修し、修了することが可能な長期履修学生制度を採用し、社会人学生の利用に供している。2年間の標準修業年限で修了する学生は過

4（4）成果

去3年間に於いて6名である。修了生の過去3年間の進路結果は下表のとおりである。

[修了生の進路状況（2010、2011、2012年度）]

2011年3月	日本キリスト教団高槻教会
2012年3月	阪神ホテルシステムズ リッツカールトン大阪
2012年3月	不明
2013年3月	進々堂
2013年3月	株式会社 クリナップ
2013年3月	株式会社 朝日教育社

＜9＞薬学研究科

本研究科は未だ完成年度を迎えておらず、評価することはできない。なお、長期履修制度を利用した社会人が1名入学しており、社会人教育に関しては貢献できている。

＜10＞生活科学研究科

生活科学研究科各専攻の成果は以下の記述のとおりである。

（生活デザイン専攻）

修士課程

生活デザイン専攻の修了者数の3年間の推移は、2010年度1名、2011年度4名、2012年度4名となっている。合計9名の修了生の進路状況は、博士課程（本学他研究科）への進学者1名、就職者6名（学校関係3名、企業3名）、不明2名である（4(4)-4 p.12、4(4)-5 p.12、4(4)-6 p.12）。

（食物栄養科学専攻）

修士課程

食物栄養科学専攻での教育成果は、最終的には修士論文発表会における質疑応答とその後の専攻委員会での論文審議によって測定する。臨床栄養学コースでは、修了年次中に行われる中間発表においても成果を測定する。

食物栄養科学専攻修了者数の過去3年間の推移は、2010年度食物栄養科学コース0名、臨床栄養学コース2名（うち社会人1名）、2011年度食物栄養科学コース1名、臨床栄養学コース4名（うち社会人3名）、2012年度食物栄養科学コース1名、臨床栄養学コース1名となっている。本専攻では最長6年間までの長期履修学生制度を採用しており、特に臨床栄養学コースでは管理栄養士として働く社会人のスキルアップを教育目標の一つとしていることから、社会人学生の受入れに役立っている。3年間の修了生のうち社会人4名はいずれも管理栄養士であり、残る5名の進路結果は、企業就職3名、不明その他2名である（4(4)-3 p.12、4(4)-5 p.12、4(4)-6 p.12）。

（2）学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。

＜1＞大学全体

【卒業要件】

学部卒業要件は学則に規定され、履修要項で学生に周知されている。

ほとんどの学部の卒業に必要な単位数は124単位であるが、小1・幼1の教職課程と保育士養成課程を有する現代社会学部現代こども学科は130単位、管理栄養士養成課程等を有する生活科学部食物栄養科学科管理栄養士課程は138単位、6年制課程である薬学部医療薬学科は190単位となっている。

【卒業論文・卒業研究】

学部のほとんどの学科において、卒業論文または卒業研究の提出が必須となっている他、学科ごとに卒業論文または卒業研究の発表会が開催されている。発表会での発表方法も評価対象となっている学部学科もある。

【審査手続】

卒業判定は、単位の修得状況に基づいて教授会でされる。卒業判定は、本学学則の卒業要件に則って適切に実施されている。卒業判定の教授会は学期ごとに開催されている。

【大学院修了要件】

大学院の修了要件は、大学院学則に規定され、履修要項で学生に周知されている。また、新入生オリエンテーション期間では、履修登録説明と合わせて、修了要件を詳しく説明している。

【修士・博士論文審査】

大学院の修士及び博士論文審査は、本学学位規則に則って主査・副査により行われる。大学院のすべての課程で学位論文の提出が義務付けられている。審査は研究科ごとに口頭試問を含めて実施されている。

【審査手続】

大学院所定の単位を修得し、学位論文審査に合格した場合は、各研究科委員会の審議を経て、大学院委員会で修了の判定が行われる。修士・博士学位審査は、本学学位規則、大学院学則に則って適切に実施されている。

〈2〉学芸学部

学芸学部では、卒業のために必要な単位を『学芸学部履修要項・シラバス』（資料4(4)-10 p. 26）に明示するとともに、学期はじめに登録相談などを行うことや、教員が学生の成績を随時確認することをとおして、卒業単位修得のための説明や指導に向けた適切な体制をとっている。更に、学科ごとでは、卒業のために必要な単位は『学芸学部履修要項・シラバス』において学科別でわかりやすく明示している（4(4)-10 p. 123）。また、学生の理解を深めるために、4月初めの新入生オリエンテーションにおいて教務課の履修登録ガイダンスに加え、学科ごとにも登録説明会を行い、教務主任から説明を行っている。

〈3〉現代社会学部

4（4）成果

現代社会学部では、『現代社会学部履修要項・シラバス』（4(4)-11）において、学科ごとに卒業必要単位を明示しており、卒業判定は、学部教員会議、全学教授会において年に1回厳正に行っている。両学科とも卒業論文、課題研究を課し、各学科で卒業研究発表を行っている。各学科の現状は以下のとおりである。

（社会システム学科）

社会システム学科では、全学共通の学位授与方針に基づき、専門分野の知識・態度・技能に関して、次の基準に達している者に学位を授与する。

法律、情報処理、外国語運用能力をまず共通に身につけ、5コースに置かれた専門的授業において理論的、実践的知識を学際的に獲得し、最後に卒業研究において深い専門的な知識を修得している。

本学科では、幅広い教養と高い専門性を習得することを目的として、多様な科目群を各学生が自らの目標に応じて計画的に履修できるよう、科目の配当年次もできる限り弾力的にし、柔軟かつ系統的なカリキュラムを組めるようにしている。このようなカリキュラムの下、学生がバランスよく適切に修了要件となる単位を習得している全学体制で確認し、最終的に全学教授会で卒業認定を行っている。

（現代こども学科）

現代こども学科では、全学共通の学位授与方針に基づき、専門分野の知識・態度・技能に関して、次の基準に達している者に学位を授与する。

『現代社会学部履修要項・シラバス』（4(4)-11）で卒業必要単位を明示しており、卒業判定は、教授会において年に2回厳正に行っている。卒業研究については、必修であり、卒業研究発表会をパネル発表等で行い、公開している。これは、卒業認定においても重要な役割を果たしている。

〈4〉薬学部

大学の教育理念と本学部の教育研究目標を達成するために、カリキュラムポリシーを設定し、卒業に必要な最低単位数を設定している（4(4)-12）。すべての履修科目で講義内容（薬学科目では到達目標が薬学コアカリキュラムのSB0の形で記載）がシラバス中に明示され、成績評価の基準が定量的に記載されており、これはシラバスおよびホームページによって学生に周知されている。また、成績基準（60%未満不合格、60%以上可、70%以上良、80%以上優、90%以上秀）も学則に定められ、学生に周知されている。成績の一覧表を保護者宛にも郵送している。成績に関して疑義のある場合には、申し立て制度が設けられており（4(4)-12 p. 32）、全学体制として、教務部が対処している。

特に6年間の総仕上げであり、薬剤師としての知識レベルを評価する6年次科目である薬学特別演習は、薬学部の全ての専任教員が担当しているため、担当教員全員で、2月上旬に点数を確認している。この科目の単位試験は正答を公表しており、学生は自己の成績を精確に確認することができる。従って、不幸にして点数が足りず、卒業延期となった学生については、客観的なデータに基づき指導することが可能となっている。

また、客観評価が困難な科目である卒業研究においては、副査制度をおき、評価項目ごとの採点表を採用することにより、一定の客観性と定量性を担保している。

＜5＞表象文化学部

表象文化学部では、『表象文化学部履修要項・シラバス』(4(4)-13)で学科ごとに卒業必要単位を明示しており、卒業判定は、全学教授会において年に2回厳正に行っている。

(英語英文学科)

英語英文学科では、卒業のために必要な単位は、『表象文化学部履修要項・シラバス』(4(4)-13)に明記しており、新入生オリエンテーション、各年次秋に行う登録説明会等でも周知徹底している。4年次の「Senior Seminar」では、ゼミ担当教員は各ゼミ生が卒業できるよう適宜指導をおこなっている。

(日本語日本文学科)

日本語日本文学科では、厳しく適切に行われている。

＜6＞生活科学部

生活科学部では、卒業に必要な単位は『生活科学部履修要項・シラバス』(4(4)-14)に学科専攻別にわかりやすく明示している。また、入学時の新入生オリエンテーションなどで、成績評価、単位取得の方法、4年間のカリキュラムと合わせて、卒業要件の説明も行っている。卒業判定は、全学教授会にて厳密かつ適切に行っている。

(人間生活学科)

人間生活学科の卒業に必要な単位は、4年以上在籍して合計124単位以上を取得することであり、その内訳を含め『生活科学部履修要項・シラバス』(4(4)-14 p. 45)に詳細に明示している。また、入学時の新入生登録説明会や各年度始めの登録相談などで、成績評価、単位取得の方法、4年間のカリキュラムと合わせて、卒業要件の説明を行っている。

さらに、3年次以降のゼミナール科目(応用演習、卒業論文)の履修説明会を2年次秋学期に出席必須の形で実施している。その際、単位取得に関しても説明を行っている。履修説明会の欠席者には個別対応することで周知を徹底している。「卒業論文」は卒業論文発表会でその要旨を各人が口頭で発表し、論文を指導教員に提出することが『生活科学部履修要項・シラバス』(4(4)-14 p. 50)に明記されている。卒業判定は、全学教授会にて厳密かつ適切に行っている。

(食物栄養科学科)

食物栄養科学科では、卒業に必要な単位は『生活科学部履修要項・シラバス』(4(4)-14 p. 55、p. 65)に専攻別にわかりやすく明示している。また、入学時の新入生登録説明会や「生活科学概論」(食物科学専攻)、「1年次オリエンテーション」(管理栄養士専攻)などで、成績評価、単位取得の方法、4年間のカリキュラムと合わせて、卒業要件の説明も行っている。

本学科では卒業論文の履修要件を定めており、3年次12月に開催されるオリエンテーションでは出欠を取り、欠席者には個別対応することで周知を徹底している。卒業論文は卒業論文発表会でその要旨を各人が口頭で発表し、論文を指導教員に提出することが『生活科学部履修要項・シラバス』(4(4)-14 p. 60、p. 70)に明記されている。卒業判定は、全学教授会にて厳密かつ適切に行っている。

＜7＞文学研究科

4（4）成果

文学研究科では、修了判定は、研究科委員会にて年に2回厳正に行っている。なお、修士論文や博士論文の審査については、各専攻とも主査、副査により実施し、厳正かつ適正な審査を行っている。課程修了の要件、学位取得のプロセス等は、博士課程前期、後期ともに『大学院履修要項・時間割・シラバス』（4(4)-15 p. 34～35）に明記し、学生に周知している。

（英語英文学専攻）

博士課程（前期）

英語英文学専攻博士課程（前期）では、主査1名、副査1名による審査体制で修士論文を査読し、口頭試問を経て内容の独創性、専門性、論理性など、修士号に相応しい論文であるかを厳格かつ適正に審査する。その結果を英語英文学専攻委員会、文学研究科委員会、大学院委員会において審議する。

博士課程（後期）

英語英文学専攻博士課程（後期）では、当該分野においてレフリーのある学会誌に掲載された学術論文を含めた掲載論文を3編以上有する者が論文博士の学位申請をすることができる。提出された博士論文を主査1名と副査2名により査読した後、公開の口頭試問を実施して、博士号に値する論文であるかどうかを総合的かつ適正に審査する。なお副査には、必要に応じて、外部審査者を加えることを認め、専門性と公開性の向上に配慮している。審査結果は英語英文学専攻後期課程委員会、文学研究科博士後期課程委員会、大学院委員会で審議する。

（日本語日本文化専攻）

博士課程（前期）

日本語日本文化専攻 博士課程（前期）では、修士論文は、主査1名、副査2名の体制で厳格かつ適正な審査を行っている。修了判定は、専攻会議、研究科委員会と審議を重ねている。

博士課程（後期）

日本語日本文化専攻博士課程（後期）では、博士論文提出に際しては、レフェリーのあつる学会誌掲載論文を含む学術論文が2編以上あることを条件としている。提出された博士論文は、主査1名、副査2名の体制で、必要に応じて外部の審査者を加え、厳格かつ適正に審査している。

（情報文化専攻）

情報文化専攻では、卒業に必要な単位は、『大学院履修要項・時間割・シラバス』において専攻別でわかりやすく明示している（4(4)-15 p. 56）。修士の学位は、規定単位(32単位)習得の上、400字詰め原稿用紙60枚相当以上の論文を提出し、主査副査による一時間の口頭試問を行い、公開修士論文発表会を行った上で、文学研究科情報文化専攻委員会に主査副査から審議報告が行われ、合格認定を受けた場合、研究科委員会・大学院委員会の審議を経て授与している。また、学生の理解を深めるために、4月初めの新入生オリエンテーションにおいて登録説明会を行い、情報文化専攻主任から説明を行っている。

〈8〉国際社会システム研究科

修士課程の修了には必修科目を含めて30単位以上を修得し、修士論文を提出し、審査合

格しなければならない。これら修士論文の提出方法については「修士論文に関する内規」を定め、入学時のオリエンテーションや指導教員を通じて学生への周知を徹底している

(4(4)-16)。修士論文の審査は、指導教員である主査1名と副査1名からなる審査委員会のもとで論文審査（査読と口頭試問）を行っている。また、必要に応じて外部の教員に委員を委嘱が可能となっており、審査の公正さを確保している。審査結果を修士論文審査要旨により研究科委員会に提出し、学位規則にのっとって審査する。さらに、大学院委員会において審査し、学位の認定を行っている。

＜9＞薬学研究科

本研究科は未だ完成年度を迎えておらず、評価することはできないが、論文指導教員が主査にならないこと、博士論文が査読付き学会誌に掲載決定されていることを条件にすることは決定しており、客観性は保たれている。

＜10＞生活科学研究科

生活科学研究科では、修了判定は各専攻委員会、生活科学研究科委員会の議を経て、大学院委員会にて厳正に行っている。

（生活デザイン専攻）

修士課程

生活デザイン専攻では、修了要件、修士論文提出スケジュール等を『大学院履修要項・時間割表・シラバス』（4(4)-15 p. 60）および『修士論文の提出について』（4(4)-17）に明記して、学生に周知している。口頭発表と質疑応答は、専攻の教員や大学院生、学部学生、外部の聴講者に対して行われる。修士論文の審査は、主査1名と副査1名が審査に当たり、その評価を専攻委員会に提案し、その結果を踏まえ、さらに生活科学研究科委員会で厳正かつ適切な審査を行っている。

（食物栄養科学専攻）

修士課程

食物栄養科学専攻では、卒業に必要な単位は『大学院履修要項・時間割表・シラバス』（4(4)-15 p. 61、p. 63）にコース別にわかりやすく明示している。修士論文に対する口頭発表と質疑応答は本専攻の専任教授全員の出席のもとで行い（4(4)-15 p. 47～48）、論文については主査、副査各1名により審査してその評価を専攻委員会に提案し、委員会全体で厳格かつ適正な審査を行っている。

2. 点検・評価

●基準4「教育内容・方法・成果」（4）成果の充足状況

3つの教育理念は本学の教育の生命線であり、これらの理念に直結する豊富な科目や制度を挙げることは容易いが、これらは本学の教育の根底を支えるものであるだけに成果をすべて数値化することは難しい面もある。しかし、具現化できるものを教育目標として設定し、成果を測定できるように努めたい。なお、汎用的能力の獲得については2013年度の授業アンケートにDWCLA10に関する質問項目を追加している。

学位授与については、学部・研究科ともに明文化された規定に基づき適切に行われてい

4（4）成果

る。課程博士のあり方については改善が必要と考え、検討を行うこととしている。
よって、同基準をおおむね充足している。

①効果が上がっている事項

〈1〉大学全体

【免許・資格課程の充実】

本学では、教職課程（幼1免、小1免、中1免・高1免（英語、国語、家庭、社会、公民、地歴）、栄養教諭）、保育士課程、学芸員課程、司書課程、司書教諭課程、薬剤師養成課程、管理栄養士養成課程・栄養士養成課程、食品衛生管理者・食品衛生監視員養成課程、日本語教員課程、上級情報処理士・ウェブデザイン実務士課程、音楽療法士（日本音楽療法学会・全国音楽療法士養成協議会）、フードスペシャリスト等の免許・資格課程を設置しており、多くの学生がこれらの課程を修了している（4(4)-18）。

〈2〉学芸学部

音楽学科演奏専攻では、第一実技の集大成として公開卒業試験を実施し、学生、教員、社会に対して成果発表し検証を行っている。音楽文化専攻では、4年間の研究の集大成として卒業論文を完成させ、その成果については発表会を行う他、卒業論文要旨集を制作することにより、学生、教員、社会に対して発表し検証を行っている。

情報メディア学科では、2年次秋学期から2年間半、同一教員のもとでゼミナール科目を行っている。卒業作品、卒業論文については発表会を行い、学生、教員、社会に対して、成果発表し検証を行っている。

国際教養学科では、正規必修科目として、2年次秋学期から全学生に1年間の海外への留学を義務付けている。本体験を活かしながら、4年次のSenior Seminar Ⅲ／卒業研究Ⅲにおいて、英語による論文を完成させ、その成果も含め検証を行っている。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、94.6%の学生が4年間の履修をもって卒業している。学生の卒業研究は、卒業研究発表を行い、学部の学生に公開し、審査の公平性を確保している。

社会システム学科では、3年次の応用演習、4年次の卒業研究において、2年間、同一教員のもとで専門分野の研究を少人数教育でしっかり行う形がとられており、その成果については、4年次の2月の卒業研究発表会で全学生が発表を行い、それを他の学生、教員、保護者の目で検証を行っている。

現代こども学科では、少人数学習、グループ学習が多く取り入れられており、学生のプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力が高いことは、授業アンケートの関連項目から確認されている。

4年次の2月の卒業研究発表会で全学生が発表を行い、それを他の学生、教員、保護者の目で検証を行っている。

〈4〉薬学部

卒業に必要な最低単位数を修得できなかった学生については、所属研究室の専任教員（ア

ドバイザー) が卒業要件を満たせなかった原因とその対策、次年度の学習・履修計画について相談にのっている。再履修科目が秋学期にしかない場合は、春学期を休学する方法もあるので、必要に応じて本人との二者面談あるいは保護者を交えた三者面談を行うなど、きめ細かい対応を行っている。

＜5＞表象文化学部

英語英文学科の卒業生は、就職に限らず、国内外の大学院への進学など多彩な分野に活躍の場を広げている。

日本語日本文学科は、学科の特性から言って、教育成果を具体的な数値で計るのには馴染まず、客観的なデータを挙げることは困難であるが、毎年多くの卒業生を教壇に送っていることは、一定の成果が上がっている事の証左となろう。

＜6＞生活科学部

人間生活学科では、大学のホームページを活用し、「学科トピック」、「ゼミ・研究テーマ」などの形で教育成果を社会へ公表し、教育実態の可視化に努めている。特に、過去数回の卒業論文発表会のプログラムを公開することを通し、学生の学習成果を公表している(4(4)-19)。

食物栄養科学科では、両専攻とも実験・実習が多いカリキュラムのため、4年間を通じて常にレポート提出を求められる。また、実験・実習や臨地・校外実習では複数名で構成される班で行動することが求められることから、「分析力」「思いやる力」「自己管理力」などが身につく。管理栄養士専攻ではさらに国試対策のための勉強をする必要があるため、予習・復習の時間が多い(4(4)-2 p.16)。

＜8＞国際社会システム研究科

国際社会システム研究科では、公正な審査と手続きのもと、過去3年間に6名が終了している。

＜9＞薬学研究科

本研究科は完成年度を迎えておらず、学位授与例は未だないが、論文指導教員が主査にならないこと、博士論文内容が査読付き学会誌に掲載決定されていることを条件としているなど、客観性、公平性、質保証が担保されている。

＜10＞生活科学研究科

生活デザイン専攻では、院生に対して、教員による学習成果に関する個別測定を踏まえ、国内外の学会での口頭発表、学術雑誌等での論文発表を推奨している。若手研究者奨励賞をはじめ各種の褒章を受賞することによって、論文の完成度を高める契機ともなっている。

②改善すべき事項

＜1＞大学全体

【課程博士について】

4（4）成果

本学の博士課程（後期）では、課程在籍中に学位論文を提出し審査に合格した者に加え、博士課程（後期）満期退学後3年以内に学位論文を提出し合格した者も課程博士としている。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、上記のとおり、卒業判定は、学部教員会議、全学教授会において年に1回厳正に行われているが、卒業研究発表など学習成果の公表、プレゼンテーションについては学科においてばらつきがあり、改善の余地を残している。

社会システム学科は、定員が1学年300名と、同志社女子大学において最も大きな学科組織であるため、例えば宿泊を伴う新入生オリエンテーションキャンプ等、全学科生が一緒に行動することについては、困難を伴っている。またそのことにより、学生において、学科への帰属意識の醸成が必ずしも十分とは言えないところがあると認識しており、改善に向けた取り組みが求められる。

その取り組みの一つでもある卒業研究発表会については、やり方、時間等に関して、前年度の反省を踏まえ、より充実したものになるような工夫を重ねていくことが望まれる。また、多彩な学問領域のそれぞれに適したプレゼンテーションが行えるように、各コースでの検討を行い、充実を図っていく必要がある。

現代こども学科では、講義形式の授業に対する予習、復習の時間が少ないことが授業アンケートから確認されている。基礎的知識の習得を確実にする必要がある。

基礎的知識の習得の上で、より質的に高いプレゼンテーション能力を習得させ、卒業研究発表会などの学習成果の発表の場で活用させていく必要がある。

〈4〉薬学部

過去二回の薬剤師国家試験合格率は、全国平均を下回った。これは主に、本学の卒業率が他大学に比べて高かったことに起因するもので、入学者に対する絶対的な比率は平均より高い。しかしながら、ディプロマポリシーに従えば、薬剤師国家試験に合格できない卒業生を輩出すべきでない。これは単位認定・卒業認定が不適切であるとのそしりは免れない。今後、学生の学力増進の方策が急務である。また、本年度、薬学コアカリキュラムが改訂となり、2年後には新カリキュラムでの教育が開始される。それに合わせたカリキュラム改訂が必要である。

〈6〉生活科学部

人間生活学科では、教育成果の発表機会を一層活性化することが期待される。

食物栄養科学科では、両専攻とも必修・選択必修科目が多く、また、レポート提出に迫られるためか、「創造力」「プレゼンテーション力」「リーダーシップ」などの力が身につくにくいものと思われる（4(4)-1 p.15、p.16、26）。

〈7〉文学研究科

英語英文学専攻博士課程（前期）では、2年以内での英語論文執筆をさらに推進する。

〈8〉国際社会システム研究科

国際社会システム研究科では、上記のとおり、公正な審査において学位の認定を行っているが、研究成果のプレゼンテーションなどが行われず、公開性の担保が課題である。

＜10＞生活科学研究科

学生の側からみた成果の測定がなされていない。

3. 将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

＜1＞大学全体

【免許・資格課程の充実】

免許・資格制度の充実は、本来のリベラル・アーツ教育と相いれないものである半面、免許・資格取得のために自らの専攻分野と異なる分野の学習をすることは、視野を広げることにもつながる。昨今の学生は資格取得志向が強いいため、その学習に対するモチベーションは高い。今後ともどのような免許・資格課程が本学の学生に相応しいかを検討し、適宜免許・資格課程を充実させる。

＜2＞学芸学部

学部では学科ごとに、卒業論文や卒業作品の発表会並びに卒業試験を学内外に公開で実施している。これらは学業の集大成として、4年間学修してきた知識・技能などを運用した効果的で最適なプレゼンテーションとなっている。

＜3＞現代社会学部

学部では、全学同一日の卒業研究発表会にあわせて、両学科における卒業論文・課題研究提出者の全員が参加する、ポスターセッション形式の卒業研究発表会を実施している。あわせて学生の父母にも発表会の案内をだし、公開性の担保につとめている。

＜4＞薬学部

卒業延期となる学生の多くは6年次科目の薬学特別演習の単位試験で合格点(60点)に達しなかった場合である。この科目は秋学期科目であるため、経済的負担を考慮して春学期の休学を勧めている。しかしながら半年の休学は学生の学力低下を来す場合があり、この期間のケアを考える必要がある。

＜5＞表象文化学部

英語英文学科では、Career Introductionなどの授業で、将来の進路を見据えた学習ができるようにしている。

日本語日本文学科では、卒業時のみならず、卒業後の教員採用試験等の合格状況、教員採用状況を、より正確に掴む必要がある。

＜6＞生活科学部

人間生活学科では、学習効果を測定するための指標の一つとして、科目担当者による授

4（4）成果

業講評の充実化を図り、公表性を高めていく。

食物栄養科学科では、専門的知識や技術がその後の進路にどう活かされるかを日常の授業等を通じて各教員が意識して説明することで、さらに学習成果を上げられるようにする。

＜8＞国際社会システム研究科

国際社会システム研究科では、修士論文提出者による研究成果のプレゼンテーション（最終発表会）を2013年度から実施している。

＜9＞薬学研究科

完成年度以降、成果を検証した上で検討を行う。

＜10＞生活科学研究科

生活デザイン専攻では、TA制度を本専攻の特性を活かした形で活用し、実験・実習室、演習室の活用を一層推進しながら、助言や教育補助等により、教育機会の提供を図る。

②改善すべき事項

＜1＞大学全体

【課程博士について】

博士課程（後期）満期退学後3年以内に学位論文を提出し合格した者も課程博士としていることについては、課程博士の本来の趣旨から考えて改善が必要であると思われる。2015年度に博士課程（後期）に入学する学生から改善できるよう、各研究科および大学院委員会で検討する。

＜3＞現代社会学部

卒業研究発表会のあり方、卒業研究の成果のプレゼンテーションの方法について400名をこえる両学科の規模に応じたあり方を探る必要がある。

社会システム学科では、キャリア教育を意識し、コース毎に、所属学生の進路モデルを想定して、それに応じた履修モデルを作成し、学生に提示することが望まれる。

現代こども学科では、卒業研究発表会のプレゼンテーションの内容を、学科全学生への周知を図ることにより、小学校教員、幼稚園教員、保育士、こども関連職種、一般企業など、目標に応じたキャリア形成支援のより一層の充実が望まれる。

＜4＞薬学部

表面的な国家試験合格率上昇のために予備校化することは、大学教育の破壊であり、避けねばならない。一方で、ディプロマポリシーからは国家試験に合格できない学生を卒業させるべきでない。本学に入学してくる学生は、潜在的に国家試験に合格できる能力を備えていることは確かであり、問題は学生の自主的な学びのモチベーションを維持することである。このような考えのもと、前章と重複するが、次年度より、新入生オリエンテーションに始まり、学生に学期ごとに目標設定と自己を振り返る機会を与え、アドバイザーによる適切な助言ができる仕組みを導入することとした。そのために、学生個人ごとのポー

トフォリオを作製し、成績面・生活面の経時的な記録を作成し、これを活用することとした。

〈6〉生活科学部

人間生活学科では、作品発表会や展示会など、実学的な教育内容の成果を公表する方策を講じる必要がある。

食物栄養科学科では、知識の詰め込みになりすぎないように授業形態を工夫し、班行動の中でも交代でリーダー役を決めるなどして、「創造性」「プレゼンテーション力」「リーダーシップ」が身につけられるような場をつくることを考える。

〈7〉文学研究科

英語英文学専攻博士課程（前期）の在学生に対してキャリア支援体制の強化が必要である。小学校における英語教育が本格化する時代の趨勢に合わせて、小学校教員の免許取得を可能にする方策を考える必要がある。

〈8〉国際社会システム研究科

2013年度に実施される最終発表会の成果について検証し、修士論文の作成から完成に至るまでの研究指導に役立てる必要がある。

〈10〉生活科学研究科

学生の側からみた成果について測定できる方法を考える。

4. 根拠資料

- 4(4)-1 2012年 同志社女子大学 在学生アンケート 報告書（既出：2-18）
- 4(4)-2 2013年度春学期授業アンケート実施結果報告書（既出：4(2)-16）
- 4(4)-3 2013年度シラバスに記載されたDWCLA10集計結果
- 4(4)-4 2012年度進路・就職関係データ集（既出：4(3)-10）
- 4(4)-5 2011年度進路・就職関係データ集
- 4(4)-6 2010年度進路・就職関係データ集
- 4(4)-7 2009年度進路・就職関係データ集
- 4(4)-8 2008年度進路・就職関係データ集
- 4(4)-9 学科パンフレット2014（食物栄養科学科）（既出：1-18）
- 4(4)-10 学芸学部（音楽・情報・国際・音楽専攻科）履修要項・シラバス（既出：1-8）
- 4(4)-11 現代社会学部履修要項・シラバス（既出：1-9）
- 4(4)-12 薬学部履修要項・シラバス（既出：1-10）
- 4(4)-13 表象文化学部履修要項・シラバス（既出：1-11）
- 4(4)-14 生活科学部履修要項・シラバス（既出：1-12）
- 4(4)-15 大学院履修要項・時間割・シラバス（既出：1-13）
- 4(4)-16 同志社女子大学大学院 国際社会システム研究科国際社会システム専攻
修士論文に関する内規

4（4）成果

- 4(4)-17 生活科学研究科生活デザイン専攻修士課程1年次生対象
修士論文の提出について（既出：4(3)-6）
- 4(4)-18 2013年度 教務関係基礎統計資料、2013年度 免許・資格関係基礎統計資料
（既出：4(2)-14）
- 4(4)-19 同志社女子大学ホームページ
「学部学科：人間生活学科：2013年度 第62回卒業論文発表会プログラム」
（http://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_dep_info/life/human_life/news/2013/201362.html）
- 4(4)-20 同志社女子大学学位規則